



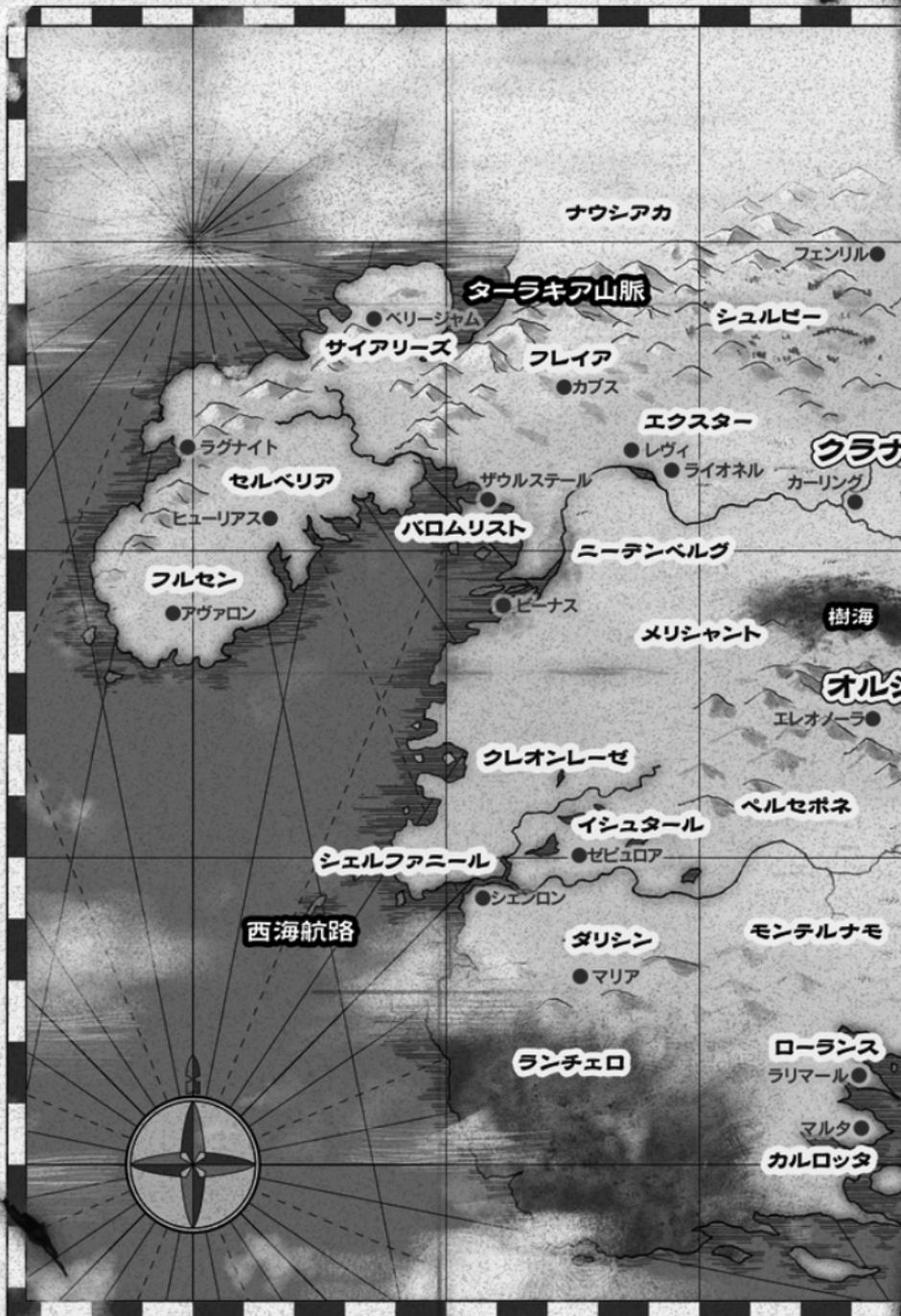
# ハーレム HAREM STUDENTS スチューデントズ

小説 竹内けん 挿絵 アライノブ

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

カブス

エクスター

ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

レヴィイ

ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニューテンベルグ

フルセン

アヴァロン

ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

シエルファニール

ゼビュロア

シェンロン

西海航路

ダリシン

モンテルナモ

マリヤ

ランチェロ

ローランス

ラリマール

マルタ

カルロッタ

## 登場人物紹介

Characters



### ドラゲリア

優雅で気品のある振る舞いを見せる娘。他者を圧倒する華麗な剣技を使う。

### ヴィルズ

立派な将軍になることを夢見て、王立士官学校に入学した少年。



## ヘンリエッタ

ことあるごとに高飛車な態度を取る少女。若くして様々な魔法を習得している。



## サメロ

ヴィルズたちのクラスを受け持つ教師。スパルタ方式で生徒たちを扱く。

第一章	士官学校第一期生
第二章	鬼教官
第三章	サバイバル訓練
第四章	じゃじゃ馬姫にお仕置き
第五章	とある学園の日常
第六章	特別な授業



「あの、ヴィルズ殿、側に行ってもいいでしょうか？」

「ああ」

ドラグリアはたき火を回り込み、ヴィルズの傍らに座った。そして、左肩に頭を預けてくる。

（えーと、このお姫様は、いったい何を考えているのだろう）

その温かくも柔らかい感覚に、いろいろと誤解しそうになったヴィルズの胸はドキドキと高鳴った。

「初めて二人つきりになりましたね」

「そうだな」

緊張したヴィルズは、いささか裏返った声で返した。

確かに、人望のあるドラグリアの周囲には常に大勢の生徒が集まっている。とてもではないが、二人きりになどなる機会はなかった。

「わたし、二人つきりでヴィルズ殿といろいろな話したいと思っていたのですが、学校ではなかなかそういう機会が持てませんでしたから、寂しかったです」

「あの……姫様」

どうにも誤解したくなるような言動に戸惑いながらも、ヴィルズが声をかけると、ドラグリアは声を硬くした。

「その言い方は嫌いです。わたしたちは同じ学生でしょ」

「はい」

至近距離にドラグリアの怒った顔がある。怒った顔も美しい。

「それじゃ、ドラグリア。何を言いたいんですか？」

「わたしはいまとってもロマンチックな気分です。胸がドキドキして、苦しい。本で読んだことがあります。これは恋だと思う」

ここまで言われて、相手は誰か、と聞くほどヴィルズは野暮ではなかった。

「……」

ヴィルズは無言のままそつと顔を近づけ、ドラグリアの唇を奪った。

ドラグリアは素直に受け入れる。

「う、うむ……うむ」

唇同士が擦れ合い、それから舌で舐めた。

ぷるんとした柔らかくも弾力のある唇を舐め回し、肉割れの中に舌を押し入れる。

ツルツルとした真珠のような前歯を舐め、さらに奥に。

ヴィルズのキステクニツクは、サメロ仕込みだ。

自然とサメロ相手と同じように手が動く。夢中になって接吻しながら、ドラグリアの胸元をまさぐってしまったのだ。

「ふむ！」

おそらくファーストキスと思われるドラグリアは驚いたようだが、牡としての本能に突

き動かされたヴィルズは止まらない。

舌をさらに奥にやっつて、ドラグリアの舌を擽<sup>から</sup>め捕<sup>と</sup>る。

同時にTシャツ越しにもわかつていた豊かな乳房を揉みしだく。成人女性であるサメロには及ばないが、この年代の少女としては充分に規格外の巨乳であろう。

ノーブラだった。夏の暑さから仕方のないことだろう。Tシャツの上からも柔らかさがよくわかる。

そのまま頂点に至ったところで、ヴィルズは戸惑う。

(あれ？ 乳首がない)

指で乳首を摘まもうとして失敗したヴィルズが、困惑しているうちに、ドラグリアは不埒な男から身を剥がした。

「はあ、はあ、はあ……」

「失礼しました」

我に返ったヴィルズが謝罪すると、ドラグリアは首を横に振るった。

「謝る必要はありません。いきなりだから、ちょっと驚いただけです……」  
それから言いづらそうに続けた。

「わたしたちはいま学生同士なのです。学生同士なら恋人になっても問題ないでしょう。その……よかったら、……最後までやってもいいですよ」

「えっ?! い、いまなんと……」

そのおよそ真面目な委員長らしくない言葉に、ウイルスは驚愕する。

「学校に戻ったら、今後いつ、こうやって二人つきりになれる機会が訪れるかわかりません。それに教官たちに見つかったら不純異性交遊として処罰されてしまうかもしれない。だから、できるときには最後までしてしまおうべきだと思うんです」

ドラグリアが潤んだ瞳で見つめている。生唾を飲んだウイルスは呻きながら確認した。

「そ、それじゃ……セックスしていいんですか？」

「ええ、好きな殿方に身体を求められることが、こんなにも喜ばしいことだとはいままで知りませんでした。昼間、お尻をじっと見られてたときから、たまらない気分になっていました。ごめんなさい。わたし、エッチな女の子なんです」

いわゆる視姦されている気分だったのだろう。お尻がプリプリと揺れていたのは、あるいは興奮の現れだったのだろうか。

「姫様っ!!」

興奮したウイルスは、ドラグリアをその場で押し倒した。

「キヤッ！」

悲鳴を上げて大地に仰向けになったドラグリアのTシャツの裾をまくって胸部を露出させる。ドラグリアはブラジャーをしていない。代わりに左右の乳首に絆創膏を貼っていた。先ほどTシャツ越しに乳首を捉えられなかった原因はこれらしい。戸惑うウイルスの視線を察して、ドラグリアは答える。

「ニップレスがどうかしましたか？ 運動すると擦れて痛いから、こうするといいつて。女子はみんなやっています」

「そ、そうなんだ……」

女の身体には秘密がいっぱいといったところだろうか。とはいえ、男としては早急に乳首を見たい。

「ニップレス、剥がしていいですか？」

「ええ、でも優しくお願いします。外すとき、少し痛いですから」  
ビリ。

絆創膏が剥がされると、むくつと乳首が盛り上がった。

（これは確かに擦れそうな乳首だ）

顔は凛々しいのに、乳首はいやらしい。興奮したヴィルズは、両手で双丘を下から持ち上げるようにして握ると、頂を飾る淡紅色の乳首にしゃぶりついた。

「あの……わたし、お風呂入ってないから……」

「そんなの関係ありません」

宣言通り、ヴィルズは委細構わずドラグリアの乳房を食った。

口内で乳首がコリコリに堅くなっていく。女の乳首は勃起してからが敏感なのだ。

サメロにそのことを仕込まれているヴィルズは、ピンピンに勃起した乳首を左右の指でシゴキ上げながら、交互に食った。

「ああ、そんな犬みたいに、はあく、いきなりそんな、強く吸われたら、はあく♪ 気持ちいい♪ ヴィルズ殿におっぱいしゃぶられるの気持ちいい♪」

優等生であり、姫騎士の鑑かがみのような女が、二つの乳首をしゃぶりつくされる気持ちよさに驚愕しているようだ。

（オナニー経験もないってことはないよな？）

彼女がオナニーしている姿、というのは想像できないが、もしやっていたとしても、それほど熱心ではなかっただろう。

年上の痴女に徹底的に仕込まれた男の織りなす快楽に翻弄されたドラグリアは、口元をだらしなく開いて、口角から涎を垂らしている。

こんな無防備な表情を人前に晒したのは、初めてなのではなからうか。

（まだまだ、もつともつと感じてもらおう♪）

自分よりも一回りも年上の淫乱女教師に、弄ばれる日々を送っていたヴィルズは、その反動からか、この無垢な少女を手中に、徹底的に感じさせてやりたくなる。

「はあ、はあ、はあ……」

乳首責めだけでイッてしまいそうなドラグリアの乳首を吸いながら、ヴィルズは右手を下ろしていき、そつとブルマの中に入れる。

指先にショーツの感覚があったので、その下に入れる。

「っ!？」

さすがにドラグリアは目を見張る。

すべすべの腹部から進むと、シャリシャリとした陰毛の手ごたえがあった。

(意外に毛深い?)

どうしてもサメロと比べてしまうのだが、繁茂面積が広く、一本一本の毛足が長い気がする。

しかし、考えてみれば、大人の女であるサメロは、陰毛の手入れをしていたのだろう。それに対して、ドラグリアの陰毛は自然体なのだ。

今夜、こんなところで、男に身を預けることになるとは想定していなかったのだから当然であろう。

ヴィルズは乳首を吸いながら、その豊かな陰毛を掻きむしってやった。ブルマ越しに五指が踊る。

ドラグリアは恥ずかしそうに、太腿を閉じようとするが、もはや股間に手が入ってしまったのだから無意味な抵抗だ。

ただ腰をクネクネと左右にくねらせるだけ。

「ああ、あん、恥ずかしい……」

恥辱の声とともにブルマの中では湿度が増していき、左右の足穴から、ぬらぬらとした粘液が溢れている。

やがて頃合いを見計らって、ブルマから右手を引き抜き、ドラグリアの眼前に翳してや

る。

親指と人差し指、中指に、ヌラーとした粘液が糸を引いている。

「見てください。ドラグリアのオマ○コ汁がこんなにいっぱい♪」

顔を真っ赤に紅潮させたドラグリアは、視線を泳がせながら言い訳する。

「わたしは、あの呼吸する種馬の娘です。身体がエッチなのは仕方ありません」

ドラグリアの言い訳に、ヴィルズは笑ってしまつた。

「つまり、エッチな身体は高貴な証と言いたいですね」

「そ、そういうわけでは……」

「では、高貴なオマ○コを見せていただきます」

嘯いたヴィルズは、ドラグリアの両足を豪快に左右に広げさせた。そして、臙脂色のブルマ越しに股間をなぞる。

吸収力に優れた布地の表面に、大きな沁みができ、生殖器の凹凸が浮き出てしまう。

それから股布を挿むとぐいっと右に避けた。

股間とブルマの間に、ヌラーとした粘液の糸が引く。

「あっ、はぁ、あぁ……」

異性に生殖器を晒したドラグリアは、羞恥の悲鳴を上げて喘いだ。

かぱっと開いたお姫様の秘密の場所が、星灯に照らされる。

中央を飾る陰毛は、頭髮と同じ白銀色で、豊かだった。

夜露に濡れ輝いているが、ふさふさと立ち上がっているように感じるのは、立毛現象であろう。女性は性的興奮に襲われ始めたとき、陰毛がふさふさと立ち上がるのだ。

ゴクリ。

一つ生唾を飲んだヴィルズは、両手の指を伸ばし、白銀色の豊かな陰毛を掻き分けると、肉割れを発見。その左右に人差し指をあてがうと、豪快に開いた。

かばっ。

サメロよりも全体的に小ぶりだった。しかし、中のパーツは基本的に同じようだ。

(うわ、高貴な方でもオマ○コあるんだよなあ)

感動したヴィルズは、包皮に包まれているクリトリス、蜜を溢れさせている膣穴やきゅつと引き締まった肛門まで観察してしまった。

残念ながら、この暗がりでは尿道までは見つけることは不可能だ。

サメロの食虫植物を思わせる肉穴とは違う。清楚可憐な乙女の肉壺だった。まるで飴細工のようだ。

「ああ、そんな、見ないでください。ああ♪」

剥きだしにされた女性器への視姦に、ドラグリアはいまにも気死してしまいそうだ。

「すいません。あんまりにも綺麗だったもので、見惚れてしまいました」

謝罪したヴィルズは、陰唇へと顔を下ろした。

温かい湿気が、ヴィルズの鼻先を打つ。

「あ、なにをつつ!？」

ドラグリアが止める間もなく、ヴィルズは肉の花園へと口づけをする。鉛細工のような作りであるから、甘いかと思いきや、すっぱい味がした。

「あ、そこ汚い」

ドラグリアは先ほど野ションをしたばかりだ。風呂にも入っていない。

今日は一日、歩き通し、蜘蛛から逃げ、龍と戦った。いろいろあつてたつぷりと汗を掻いたのだろう。

なかなか強烈な匂いだ。

しかし、それは濃縮された牝臭である。牡を引き寄せるホルモンの塊であった。

ペロペロペロペロ……。

興奮したヴィルズの舌は、ドラグリアの肉唇の中の襞の一枚一枚をなぞりしやぶった。

「ひい、ああ……、すごい、ああ、飛びそう、ああ、星空に吸い込まれる。ああ、飛んじやう」

ドラグリアは我を忘れて夜空に叫び、ヴィルズの鼻先では、によきつと淫核が勃起したのがわかった。

しかし、包皮から少しだけ先端を覗かせただけだ。

(ドラグリアって包茎なんだ)

サメロから教育と称して、無理やり剥き癖をつけられたことを思い出したヴィルズは、

嗜虐的な気分になった。

優等生なお姫様の淫核を口に含む、唇を使つて器用に剥いてしまふ。

「ひい、らめ、らめ、らめて、そこは刺激が強すぎる、ひい……」

強すぎる刺激に耐えかねて、ドラグリアは泣き喚くが、ヴィルズは容赦なくコリコリとした肉芽を舌先で転がした。

「ああ、おかしく、おかしくなっちゃう！ 飛ぶ、飛んじやうの、ああ、空に墮ちる♪ ああああ♪」

満点の星空に手を翳して、ドラグリアの全身がブルブルブルと震えたかと思うと、そのままぐったりと脱力した。

ドラグリアが絶頂したのだと察したヴィルズは、ようやく陰唇から顔を上げた。

Tシャツを腹部からからげて双乳を露出、臙脂色のブルマの股布を右に避けられた姫騎士は、潰れた蛙のような蟹股開きになって、惚けた表情で夜空を見ている。

そんな中、肉穴だけがヒクヒクと開閉して止めどなく、粘液を吐き出していた。  
(うわ、漏らしちゃったわけじゃないよな。すげえ、愛液の量♪)

もはやどう見ても、犯しごろというやつであろう。

相手がお姫様だ、とはわかつているのだが、もはや止められない。

(やりたい。ドラグリアの体内にぶち込みたい。この小さなオマ○コの中にチンポぶち込んで、ひいひい言わせてやりたい)



「お前無茶苦茶言っているな」

呆れるヴィルズを他所に、ヘンリエッタは引つ張り出した逸物を扱きながら唸るように応じる。

「おぬしが変なことをしたせいで、わらわのあそこが痛い疼くようになったのじゃ。責任を取ってもらおう」

「責任って!？」

男として抱いた女に責任を感じていないわけではないが、ヘンリエッタのやっていることは滅茶苦茶である。

「別におぬしには不満はあるまい。おぬしが強引にわらわを押し倒したのじゃ。だいたい、おぬしの年頃の男の子は、女とやることしか考えておらぬと聞くぞ。そのような野獣を放置するわけにはいかぬ。わらわが身をていして、他の学生たちの安全を守らねばならぬ」  
「何やららしくない理屈を並べ立てながら、たちまちのうちに体積を何倍にもさせる逸物を、ヘンリエッタは好奇心いっぱいに弄ぶ。

肉袋を突つつき、辜丸に興味深そうな視線を送っている。

そして、ぱくりと亀頭部を咥え込むと、ヴィルズの顔を見上げながら啜り上げてきた。  
「ジュル、ジュルジュルジュル……」

上目づかいにヴィルズの様子を窺いながら、逸物を啜り上げる表情が意外と可愛い。  
(うゝむ、フェラ顔がなんかドラグリアに似ているな)

異母姉妹と言っても、ドラグリアとヘンリエッタは、外見性格ともまったく似ていない。しかし、逸物を啜えている表情がどこか似ているように感じるのは先入観のなせる技なのだろうか。

「ろーじゃ、わらわはおぬしのチンポ奴隷だからな。チンポだつて飲んで啜えてやるぞ」  
悪戯っぽく琥珀色の瞳を輝かせながら、美味しそうに肉棒を吸り上げるヘンリエッタのフェラは、初体験ということもあつて、上手とは言いかねるが、その熱い情熱だけは伝わってきた。

「まったく、しょうがない姫様だな」

その情熱に押しきらられたヴィルズが、茶色の頭髮を撫でてやると、ヘンリエッタは嬉しそうに目を細めた。

そして、逸物から口を離す。

「わらわといたすか？」

「ああ、喜んで」

ヴィルズの言葉に嬉しそうな顔をしたヘンリエッタは、嬉々として立ち上がるとスカートの中に手を入れた。

そして、黒地に赤いレースの付いたセクシーショーツを下ろして、左右の足を交互に上げて抜きとった。それを丁寧に畳んで胸のポケットに入れる。

妖艶に笑ったヘンリエッタは、そのままヴィルズの腰に跨がってこようとしたので、ヴ

イルズは慌てて止める。

「ちよつと待て、いきなりはないだろ」

「なんじゃ。いやなのか？」

ヘンリエッタは不満そうに頬を膨らませる。

「いや、別に嫌とは言つてないだろ。そんな顔をするなよ。まったく、仕方ないな」  
性急すぎるヘンリエッタを前に、ヴィルズは苦笑してしまう。

「セックスしたいなら、まずおっぱいぐらい触られろよ」

「わらわのおっぱい、触りたいのか？」

「ああ。すつごく触りたい」

ヴィルズが素直に頷く、ヘンリエッタは嬉しそうに頷く。

「まあ、いいじゃろ」

男に見せつけるようにヘンリエッタは、制服のブラウスの胸元を開いた。  
中からは黒地に赤いレースのブラジャーに包まれた胸元があらわになる。

「どおじゃ、似合うであらう」

「ああ、とつてもセクシーだ」

ヴィルズの褒め言葉に、ヘンリエッタは照れたように頬を掻きながら、そっぽを向く。

「そりゃ、そうじゃろ。おぬしに見せてやろうと思つて、わざわざアレステリアお姉ちゃんに頼んで、レギンス商会のお洒落下着を取り寄せたんじゃから」

レギンス商会というのは、世界の富の数パーセントを握るとも言われる、ドモスの王家御用商人だ。その御曹司とヘンリエッタたちの異母姉はいい仲であるらしい。

近いうちに挙式するだろう、と言われている。

「そうか、ありがとうな。でも、俺は中身のほうが好きなんだ」

「もう、ケダモノじゃの」

呆れた顔をしながらも、身体を求められることは悪い気がしないのだろう。ヘンリエッタは嬉々としてブラジャーを外してみせた。

年相応の双乳があらわとなる。ピンク色の乳首がツンと小生意気そうに上を向いているのが印象的だ。

「お前のおっぱいって綺麗だな」

「あ、あたりまえじゃ。気に入ったんなら好きにするがよい」

そこで便座に座ったヴィルズは両手を伸ばして、双乳を包み込むと、弄び。ツンと上を向いた乳首をさらにシコリ立たせると、ヘンリエッタの身体を抱き寄せて、乳首を啜え込む。

「もうそんなにおっぱいにしゃぶりつくなんて、まるで赤ちゃんみたいじゃな」

前方に倒れ込むようにしてヴィルズの頭を抱いたヘンリエッタは、小馬鹿にした口調ながら、まんざらでもない声を出す。

（こいつの憎まれ口も、可愛く感じるようになったな）

内心で苦笑しながらヴィルズは、何気なく右手を下ろして、ヘンリエッタの剥きだし股間を弄った。

膣穴に中指を入れると、ヌチョリと難なく入る。

「うん♪」

ヘンリエッタは気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

どうやら、処女膜もなくなり、異物を入れることにそれほど抵抗がなくなったようだ。そこでさらに人差し指も入れて、二本の指で振るよむようにして、穿つてやる。

「ほう、うん、ほう……指じゃ、イヤ……」

「なんならいいんだ？」

ヴィルズが意地悪に質問すると、ヘンリエッタはその耳元で熱く囁いた。

「……おちんちん入れて欲しい」

「ヘンリエッタは好き者だな」

ヴィルズが笑いながら指を抜いてやると、ヘンリエッタは不満そうに頬を膨らませる。

「おぬしが無理やり、わらわを女にしたのではないか」

拗すねているヘンリエッタの表情が可愛くて、ヴィルズは降参する。

「仕方ないな。ほら、ここに跨がって」

「こ、こうか？」

便座に座るヴィルズの腰の上に、ヘンリエッタは恐る恐る跨がった。

いきり立つ逸物の切っ先が、濡れた肉壺に添えられる。

「ああ、そのまま腰を下ろして」

「わかった」

真面目な顔で頷いたヘンリエッタは、ゆっくりと腰を下ろしてくる。

ズブ、ズブズブズブ……。

すでに遮蔽物のない蜜壺は、自重によって肉棒を飲み込んでいった。

「はあ、す、すごい……この充実感♪ これはどんな魔法でも敵わぬ♪」

ドスンと座り込んでしまったヘンリエッタは、軽くイってしまったのか、そのまま仰向けに倒れそうになったから、慌ててヴィルズが両手で尻朶を掴んで支える。

その拍子に中指の先が、肛門に触れてしまった。

「はう♪」

ビクビクビク！

ヘンリエッタの肢体が激しく痙攣したことに、ヴィルズは苦笑する。

「お前、ほんとアナル好きだな」

「別に好きじゃない」

ヘンリエッタは心外だと言いたげに頬を膨らませる。

「そうか？ 俺には大好きなように見えるがな。ほら」

ヴィルズの右手の中指が、あっさりと肛門の中にもぐり込んでしまった。

「ひい、指、入れないで……」

動転の声を張り上げたヘンリエッタは、同時にぎゅつと膣洞も締めてきた。

肛門と膣穴は、8の字の筋肉で繋がっているのだという。だから、肛門を締めると、同時に膣穴も締まるのだ。

「なら認めちまえよ。アナルが気持ちいいって」

抑揄しながら、ヴィルズは腰を突き上げ、尻に入れた指でズボズボと掘削している。

「ひいあゝ らめてええええゝ」

「さあ、どうだ。オマ○コにチンポぶち込まれながら、尻の穴を弄られて気持ちよくないのか？」

ヘンリエッタは天を仰ぎ、口からだらしなく舌を出しながら、白目を剥いていた。

「き、ギモヂイイト お尻の穴に指を入れられながら、ヴィルズのぶつといチンポでズボズボやられるの最高に気持ちいいゝ」

気位の高いお姫様は、断腸の思いで自らの変態的な性癖を自虐的に認めた。

「ヘンリエッタは変態だな」

「おぬしがわらわを変態にしたのであろう」

顔を真っ赤にしたヘンリエッタは、目に涙を溜めて訴える。

普段の高慢さを知っているがゆえに、なんとも男の嗜虐心をくすぐられたヴィルズは、ますます夢中になってアナルを穿り、そして突き上げた。

「ひい、ひい、ひい」

「おいおい、そんなに大きな声を出したらダメだろ。ここは校内だぞ」

「それはわかっているけど、ああ、声が止まらない……あつ」

単なる喘ぎ声とは違う、妙な声を出したのでヴィルズは質問する。

「今度はどうした？」

「おぬしが変わるところを弄るから、その……おしつこしたくなってきた……」

セックスの最中に尿意を催すなど、レディとしての礼儀に反するとも思っただろう。顔を真っ赤にしたヘンリエッタは、目を泳がせながら言いづらそうに告白した。

しかし、ヴィルズのほうはますます嗜虐心を刺激される。

「ここをどこだと思っている。トイレだぞ。そのまま失禁してもいいぜ。なんなら大きいほうでも」

「馬鹿を言うでない。つてやめよ、本当に漏れそうなのじゃ」

「まったく煩いな。ほら、これでも啜えろ」

ヘンリエッタの胸のポケットから赤地に黒レースのセクシーショーツを摘み上げたヴィルズは、それをそのままヘンリエッタの口元に押し込んだ。

自分の脱ぎたてのパンツを啜えさせられるなど屈辱だろう。ヘンリエッタの目元には涙が浮かんでいる。

しかし、その被虐感が女をどうしようもなく高めるらしい。

腔洞のほうは一段と、キュンキュンと締めてきた。

「ふう、ふう、ふう」

屈辱に涙しながらも、鼻息も荒く悶えるさまは、高飛車お嬢様も、すっかり愛欲の奴隷に堕ちてしまったことを示しているかのようだった。

そんなときである。トイレに誰かが入ってきた。やむなく、ヘンリエッタは必死に息を殺す。

生徒は、隣の個室に入る。衣擦れの音がして、咄きが聞こえてきた。

「ふう、ヴィルズ殿はどこに行ったのかしら？」

その声から、ドラグリアであったことが察せられた。

「ふう……」

気の抜ける吐息とともに、放尿の音がある。

（またこの間みたい、後ろに向かっておしっこを飛ばしているのだろうか？）

そんなことを考えている間に、用を済ませたドラグリアは出て行った。

その間、ずっと息を潜めていたヴィルズは、やおら宣言する。

「それじゃ一気にいくからな」

「ふぐっ！」

尻の穴に指を突っ込んだまま、ヴィルズはヘンリエッタの身体を激しく上下させた。

「ふぐっ、ふぐっ、ふぐっ」



世界中の女教師たちから、物凄い非難がくるだろう台詞をあつさり吐く。

サメロの独特の哲学に、残念ながらドラグリアも、ヘンリエッタもついていけないらしい。困惑した表情を浮かべる。

「何よりも、こいつは元々本官が仕込んでいた犬っころだぞ。少々、躰がなくなってな。美味そうな肉に我慢できずに食らいついてしまっただけだ」

ついにばらされた。

（今度こそ死んだ）

と思ったヴィルズは、顔を上げるのが怖くて、現実逃避にただひたすら目の陰唇を貪る。

しかし、聞こえてきた反応は予想外のものだった。

「ケラケラケラ、ほんとしょうもないやつ。サメロ教官。わらわにもこのダメ犬の躰を協力させてくれ」

「わたしもやりとうございます」

ヴィルズは耳を疑うが、サメロは予定通りと哄笑する。

「くっくくくっ、貴様ならそう言うと思っていたよ。なら、貴様らもパンツを脱いで、汚いオマ○コをこいつに舐めさせる」

「はい！」

妙に菌切れよく返事をしたドラグリアとヘンリエッタは、スカートの中に手をつまむ

と、ショーツを脱ぎ捨てた。

そして、吊り上げられているヴィルズの肩の上に無理やり足を入れてきた。ヴィルズの右肩にドラグリアが、左肩にヘンリエッタが、それぞれ跨がる。

ぷん、と女の性臭が鼻につく。

前はもちろん、右を見ても、左を見ても、あるのは陰毛に彩られた陰唇である。

茫然としているヴィルズに、サメロの嘲笑が浴びせられた。

「さあ、貴様の大好物だろ。好きなだけお食べ」

「あ、はい」

我に返ったヴィルズは、顔を夢中になって左右に動かし、三つの陰唇を食った。

いずれの陰唇もすでに、ドロドロに濡れている。しかし、大きさや形はどれも違った。  
(こうやってみると、オマ○コもそれぞれ個性的なんだよな)

陰唇の大きさで言えば、サメロのものが一番大きい。ヘンリエッタは小さい。ドラグリアは薄いといった感じだ。

匂いで言えば、左右の若い陰唇から立ち昇る匂いが強烈だ。

やはり、若い女のほうが、体臭はきつくなるものなのだろう。

三者三様の性臭と光景に包まれて、脳を麻痺させたヴィルズは、ただ飢えぬ犬のように目の前の餌を貪り続ける。

「まったく、夢中になって舐めちゃって、ほんとアホ犬なんじゃない」

呆れた声を出すヘンリエッタを、ドラグリアが窘めた。

「でも、そんなアホ犬に舐められて飲んで、わたしたちも同レベルですね」

「違ういな♪」

ヘンリエッタは素直に認めた。

三種類の愛液で顔をベトベトにしたヴィルズが至福に浸っていると、サメロが新たな指令を出した。

「よく頑張ったわね。ご褒美あげるから、口を開けな」

理性を失って久しいヴィルズは、言われるがままにクンニを中断して素直に口を開いた。

「くっくっくっ♪」

すっかり従順な犬に躡けられたヴィルズの姿に満足げに頷いたサメロは、左右の少女の耳元で何やら囁く。

何を言われたのか二人は蒼白になる。

「そ、そんな……そんなことできません」

「何を考えておるのじゃ」

口々に反発する教え子たちを、女教師は諭す。

「心配には及ばん。男ってこういうことでも飲ぶんだよ」

「本当でしょうか？」

「ウソだったら許さんぞ」

担任教師の説明に、ドラグリアとヘンリエッタは半信半疑に感じる。

「まあ、騙されたと思ってやってみろ」

サメロの言葉に、ドラグリアとヘンリエッタは顔を見合わせる。そして、何やら蟹股になっっている下半身に力を入れて踏ん張った。

「くっ、やっぱ無理です」

「そもそもわらは立っただまなどしたことがない」

ドラグリアとヘンリエッタが口々に無理を訴えていると、冷笑を浮かべたサメロが、ヴィルズの鼻先で自らの陰唇を開いてみせた。

「そう難しく考えるな。これは牡犬へのマーキングだ。これは自分の男だとな。ふう」

軽く息を吐いた次の瞬間、サメロの陰唇から熱い雫が飛び出し、ヴィルズの顔にかかった。

（え、これっておしっこ……）

ヴィルズは驚いたが、もはや逃げる道はない。口を開けていたので、口内にも入ってくる。

「あっ」

サメロの行為に驚いたドラグリアとヘンリエッタもまた、釣られたように放尿を始めた。シャー……。

三本の雫が、ヴィルズの顔面に勢いよく浴びせられる。最初に口を開けさせられていた

ので、三種類の小水が、口腔で混じりあう。

否応なく口内に溜まった分をヴィルズは飲んでしまった。

「あ、飲んでいるのか。おしっこじゃぞ。信じられぬ」

呆れながらもヘンリエッタは声に興奮を隠しきれていない。

「ああ、もうわたし、こんなことやってしまった。お母様に顔向けできない」

ドラグリアは、自らの王女としての気品が音を立てて崩れ落ちている気分を味わっているようだ。

「ふう……」

やがて放尿を終えたドラグリアとヘンリエッタは、燃え尽きたかのように茫然としている。

そこにサメロの声が響く。

「ほら、ちんちんがギンギンに復活しているぞ」

釣られてドラグリアとヘンリエッタは、ヴィルズの下半身を見下ろして頬を染める。

「ほんとどうしようもないマゾ犬だな」

サメロはヴィルズの両手を吊り上げていた組紐を解くと、仰向けに押し倒した。

「さてと、それではヴィルズ。どちらのオマ○コに入りたいか。決まったか？」

「……」

答えられるはずのない質問を受けて、ヴィルズが押し黙っていると、サメロが腰に跨が

ってきた

「仕方ないな。ここは本官が頂くとしよう」

いきり立つ逸物がサメロの陰唇に添えられて、ゆっくりと腰が下ろされた。

ズブズブズブ……。

男根が飲み込まれていく光景に、惚けていた姫君たちが我に返る。

「ちょ、ちょっと何をやっているのです！」

「そうじゃ、ヴィルズはわらわの男じゃぞ！」

ドラグリアとヘンリエッタが詰め寄ると、サメロが両手を広げて手招きをした。

「そう妬くな。そんなに早く食べたいのなら、本官に奉仕したらどうだ。恩師に奉仕するのは教え子の務めというものだろう」

「誰が恩師か！」

「こんなのがわたしたちの教師だなんて、信じられません！」

口々に文句を言ったヘンリエッタとドラグリアだが、サメロが手を伸ばし自らの胸に抱き寄せると、意外と素直にサメロの乳首を咥えた。

「くつくつく、いいぞ。本官は教え子たちとこうやって楽しむ機会があることを期待していたからな。思ったよりも早く夢が実現して嬉しいぞ」

教え子たちの奉仕に満足したサメロは両手を伸ばすと、お礼とばかりに自らの乳房に吸いついている少女たちの陰唇を弄んだ。

「うむ、ううむ……」

女の身体は女がよく知っている。サメロにとって、ドラグリアやヘンリエッタの身体は昔通った道というところだろう。

その手管は実に巧妙だった。

ドラグリアもヘンリエッタも、サメロの乳首を舐めしやぶりながら、腰をクネクネと動かして熱い鼻息を漏らす。

(うわあ……)

女たち三人が睦みあう光景に、ヴィルズが魅入っていると、サメロの叱責が飛んだ。

「どうした！ ヴィルズ、腰がお留守だぞ。得意の荒腰はどうした！」

我に返ったヴィルズは必死に腰を上下させた。

サメロだけでなく、ドラグリアとヘンリエッタの重さも加わり、腰を動かすのも大変だった。同時にかつてない充実感も覚えた。

「あは、いいぞ、いいぞ、ああ、もつと、激しく、もつと鬼のように！」

サメロは両手でドラグリア、ヘンリエッタの陰唇を弄くりながら、自らも腰を鬼のように前後させた。

(う、すげえ、ちんぽが振り回される)

元々サメロは激しい交わりが好きな女であったが、今日は一段と激しい。あつという間に追い詰められたヴィルズは慈悲を乞うた。



「すみません。もう、もう出ます」

「いいぞ。出せるもんなら、出してしろ」

「出ます」

悲鳴に似た声を出しながら、両手に手錠をかけられたヴィルズは、仰向けのまま腰だけを突き出した。

「あ、あああ……」

獣も恥じらうようなまぐわいの果てにサメロは気持ちよく絶頂した。ヴィルズもまた射精したと思った……のだが。

「えっ!？」

気持ちよく射精したと思ったのに、出ない。

ヴィルズが戸惑っていると、一息ついたサメロは、両手に少女たちを抱えながら悠然と結合を解く。

ここでヴィルズは理解した。いつのまにか逸物の根元に紙縫こよりが結ばれていたのだ。

「そう簡単に、なんども射精させてやると思ったか」

「ひ、ひどい……」

いつかの抜かず三発の意趣返しということだろうか。射精したくともできない逸物が、無様にピクピクと痙攣している。

※

「さて、次は貴様らの番だな。しかし、どちらかを先にすると遺恨になるか。本官も恨まられたくないからな。貴様ら、交互に入れろ」

サメロは自分の左右乳首に吸いつき、惚けている教え子たちを引き離すと、二人を抱き合わせるようにして、ヴェルズの腰を跨がらせた。

「さあ、こんな屑男に遠慮することはない。自らの本能に従い、身勝手に腰を振るつて楽しめ」

ドラグリアもヘンリエッタも許容量を超えた変態行為に茫然としていたが、ぱんつとサメロに尻を叩かれて我に返った。

艶めかしい悲鳴を上げた二人は、恥ずかしそうに互いの顔を見る。

「ヘンリエッタ……」

「ドラグリア……」

「いくわよ」

「うむ、よかろう」

すっかり痴情に狂った王女たちは、互いに抱き合ったまま腰をゆつくりと下ろした。

「あん♪」

ズボリ、まずはドラグリアのミミズののたうつような膣穴に入った。そして、二人は同時に身体を上げて、再び腰を落とす。

「うん♪」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!